

令和2年度笠岡市まちづくり活動報告会の結果報告

1 日 時 令和3年1月23日（土）13：30～16：00

2 場 所 笠岡市民会館ホール・ホワイエ

3 主 催 笠岡市（協働のまちづくり課）

4 目 的 笠岡市では、住民主体のまちづくりを推進するため、地域活動を行う町内会や公民館など、様々なネットワークでつながる住民自治組織「まちづくり協議会」の運営や活動に支援を行っている。

報告会を通じて、「まちづくり協議会」とは何か、その取り組みをわかりやすく紹介し、市民に広く知ってもらい、地域のまちづくり活動について考える機会となるよう開催する。

5 出席者

<笠岡市> 小林市長，松浦副市長

<来 賓> 笠岡市議会 議長 藤井義明 氏
同上 副議長 齋藤一信 氏
同上 総務文教委員長 大月隆司 氏

<発表者>

① 陶山地区みんなが輝くまちづくり協議会

「陶山地区まちづくり計画の策定」 発表者 副会長 佐藤達海 氏

② 新山地区自治会・岡山龍谷高等学校

「はと麦味噌」拡大計画！！～新山地区の思いをより多くの人へ～

発表者 はと麦味噌の会

岡山龍谷高等学校 長谷部優織 氏・南百々 氏・
村野彩乃 氏・熊谷萌生 氏・
篠原慎弥 氏

③ 北木島芸術倶楽部

「サイトスペシフィックアートと情報発信」 発表者 会長 吉川寿人 氏

④ 地域おこし協力隊

「暮らしの「見える化」で繋がる笠岡」 発表者 平岡顕治 氏

<コメンテーター>

特定非営利活動法人みんなの集落研究所 首席研究員 阿部典子 氏
笠岡市市民活動支援センターまちづくりアドバイザー 小川孝雄 氏

6 来場者

143名（報道発表：約150名）

まちづくり協議会：21地区73名

地域おこし協力隊：2名

市議会議員：9名

その他一般参加：20名

（参加者の主な所属団体名：岡山龍谷高等学校，井原市，
浅口市，北木島芸術倶楽部，市民活動支援センター，
特定非営利活動法人みんなの集落研究所ほか）

市職員：39名（地域担当職員：23名，その他職員：16名）

7 事例発表の概要

（1）陶山地区「陶山地区まちづくり計画の策定」

- ・樋上会長から陶山地区まちづくり計画策定の説明。笠岡市では第7次総合計画において、今後数年かけて全てのまちづくり協議会で地域まちづくり計画の策定を進めることとしている。陶山地区まちづくり協議会は平成21年に発足して、9年が経とうとしている。
- ・これまで活動をしてきたが、まちづくり活動の目標になる物がなく、目指すまちづくり計画の必要を感じていた。
- ・平成30年12月の笠岡市人口基準では、10年後の笠岡市人口40,500人と見込まれる。
- ・陶山地区の人口・高齢化率は令和元年では1,354人・42.4%で、10年後では1,118人・47.3%と見込まれる。少子高齢化がますます進む。
- ・平成30年度、令和元年度の2年間かけて、陶山地区まちづくり計画として策定。
- ・策定経緯・内容を佐藤さんから説明。住みよいまちづくりのため、平成22年から29年までにワークショップ、地区懇談会、住民意識調査などをのべ6回行い、地域課題を把握。
- ・現在どのような団体がどのような活動をおこなっているかの把握。幅広い年代の意見を

聞くため、小中学生と保護者・消防団員へのアンケート実施。

- ・これらの調査から見えてきた課題は、①少子高齢化が進み、地域活力が低下していること。②公共交通の縮小により交通手段の確保困難③農業後継者不足による耕作放棄地拡大④荒廃地増加による有害鳥獣被害の増加⑤子どもの減少による幼稚園の休園・小学校統廃合の問題がある。地区内の現状と課題，行われている活動を明らかにした。
- ・公募委員を含む11名で計画策定委員会を立ち上げ，素案策定し，全地区民に配布。パブリックコメント実施。10件の提出があった。最終的に総会で決定した。
- ・まちづくり計画の内容は，10年後に目指すすがたを決め，そのための活動指針を3つ決めた。具体的な活動項目も活動指針にそったものを3分野決めた。その中に個々の活動があり，新規の物は6件あった。新規の活動には，目標達成期間を定めた。
- ・新規の活動主体は，現在ある組織，団体や有志によるグループの立ち上げを想定。
- ・計画の推進：推進するのは地区住民。まちづくり協議会は地区全体のことを考えながら，活動の支援をしている。
- ・若年層から地域の行事が多すぎて，役員になるのが負担という意見が多く寄せられた。時代にあった柔軟な対応も必要。
- ・計画は3年ごとに見直すこととした。

<質疑応答>

Q：これから個々に細かい実施計画を策定するのか？

A：実施に向かって動くのは，既存の団体，または，グループを立ち上げることなので，住民の意見を聞いて，住民自ら立ち上がってやる。そこから，実施計画を作る。必ずしも，実施計画を追いかけてスタートするという事に固持しているわけではない。

Q：陶山地区の年齢の内訳はどうなっているか？高齢者の%とか，指標があれば。

A：令和元年度：人口1,350人。高齢化率42.4%。

10年後想定：人口1,118人。高齢化率47.3%。

Q：まちづくり活動に対する，高齢者の参加率は？

A：年齢層の中では，若い方に比べると，高齢の方の参加が多い。

<コメンテーターによる講評>

【阿部氏】

- ・よく県内のまちづくり協議会での計画作りの話をしたり，携わることが多い。地域づくりに目的を持って進んでいかないと参加者が一部の人になる。同じ方向を見て地域作りを進めていくときに，仲間や目標が必要。→地域づくり計画

- ・なんで計画が大事なのか？ということを思いがちなところを、陶山の人たちが丁寧に話し合い、計画づくりに入る前に話し合いをして来られているのを計画につなげているところがすばらしい。
- ・どうしても年配の人が多くなる→多い課題。
- ・一部の人たちだけの地域計画にならないように、小中学生,保護者,消防団員にアンケートをとっている。
- ・従来の活動に固執せず,柔軟に。→丁寧に活動をしているところならではのご意見。
- ・時代に合った,形をしていかないと,人口減少・高齢化率上昇につながる。
- ・周到に準備して,ずっと続く活動というより,タイミングがあったときに始められて,しんどくなったらすぐやめる仕組み,ルールを大切にすればよい。

【小川氏】

- ・まちづくり計画を作る意味は,そこの住民の人が自動的にまちづくり協議会の会員になるが,そういう会員にとって,まちづくり協議会がどんな活動をしているかわかりにくい,計画があれば,どんなところと繋がって,こんな活動をしているとすぐに言える。交付金を使っていれば,交付金の説明資料としても使える。
- ・3年ごとの見直しの中で,役員会などでの引き継ぎや,活動整備の見える化。難しいものを作る必要はない。
- ・どんどんレベルが上がってきている。

(2) 新山地区・岡山龍谷高等学校

「はと麦味噌」拡大計画！！～新山地区の思いをより多くの人へ～

- ・岡山龍谷高校は,週1でRINGSという名前でSDGsのうち,住み続けられるまちづくりを軸として,一人一人にできることはないか探求活動をしている。
- ・7つの系のうち調理製菓系に所属。例年は校内でお弁当販売やイベントでの商品販売をしているが,コロナ禍でできなかった。
- ・消滅可能性都市である笠岡市を盛り上げるためこの状況下で何ができるか考えたとき,新山で製造されているはと麦味噌を知った。
- ・はと麦味噌の歴史を知り,もっと多くの人に広めるため広報班とアイス班に分かれ活動。
- ・広報班は味噌造り体験をし,歴史を調べた。
- ・アイス班は,味噌アイスや味噌だれの作成を行った。笠岡ジェラート工房 happy の協力で味噌アイスを3種類試作。味噌の量が100g・130g・150g。はと麦味噌を広めるため,

商品化を考えたが、費用がかかりすぎるため、味噌だれの作成の提案を受けた。

- ・今後、味噌だれの商品化を考えていきたい。
- ・今後、イラスト付き冊子の作成・SNSの活用・チラシ、パンフレットの作成・レシピの提案、イベント活動に取り組みたい。
- ・冊子は、子ども達でも楽しめるよう、イラストを入れ、幅広い年代の方に知ってもらおう。
- ・SNSでは、はと麦味噌の魅力的な話や情報を高校生を中心に広めていきたい。
- ・イベントは、コロナ禍で難しいかもしれないが、まずは校内でできることを考えたい。
- ・はと麦味噌の会からの発表。昭和年代に作られていたはと麦味噌を平成28年から復活に取り組む。
- ・販路拡大、味噌を核としたまちづくりの取り組みをして、若い世代につなぎたい。
- ・龍谷高校と連携することで、若い世代の情報発信力、豊かな感性での商品開発を取り入れ、外部からの気づきを教えてもらえる。
- ・少子化、過疎化への動き、コミュニティの希薄化が進みつつある。
- ・味噌づくりの会が、一歩前進して、現在休止しているとくら屋敷を古民家を活かしたみんなのたまり場にするため、運営に関わりたい。

<質疑応答>

Q：学校側の連携に至った理由は？地域側の体制などか？

A：コロナ禍の中で、お弁当作りや調理実習ができていなかった中、高校から、市役所に地域と連携できることはないか問合せ、協働のまちづくり課が新山地区と繋げた。

<コメンテーターによる講評>

【阿部氏】

- ・高校生が地域に目を向けている。上手に連携できている。
- ・高校生と一緒にしていく中で、地域のみなさんの、若い方が参加してくれたなどの、変わってきていることはあるか？
→地域には直接的にはお知らせしていないが、自治会だよりを見て、反応があった。
- ・高校生と一緒にやっていると、高校生の親の年代や、一緒に何かしたい小さい子への働きかけ、魅力化ができる。
- ・発酵食品に興味のある若い世代も多い。菌活。
- ・地域内外が繋がる取り組み。

【小川氏】

- ・自治基本条例には笠岡市民は、笠岡に住んでいる人、笠岡で仕事をしている人、笠岡で学んでいる人となっている。
- ・高校と地域のニーズが合う。
- ・地域を学びに行くのではなく、地域で学ぶという言葉がある。
- ・やるのはこれから大変だが、見ると元気をもらえる。発信していただければ。

（3）北木島芸術倶楽部「サイトスペシフィックアートと情報発信」

- ・サイトスペシフィック・アートというのは、特定の場所で、その特性を活かして制作する表現。北木島の場合は、「石の歴史」を感じる場所で、石で作られたステージの上で、北木島のオリジナルストーリーを北木島で生まれ育った人々が演劇にすること。
- ・その土地で採れた食べ物を、その土地ゆかりの食べ方で食べたら特においしく感じるといった効果を狙う。
- ・北木島芸術倶楽部は、島内外の人々に北木島の魅力を感じてもらう活動及びその場所づくりを目的に設立。2020年2月からはJR四国のツアー客に合わせ、整備した工場跡のことを説明したパネル展示と絵画、映像の展示・投影、採れたてのワカメしゃぶしゃぶの接待とお土産品の販売を行い、好評だった。
- ・今年度は、北木島は昔から青年団活動で演劇や演奏が盛んだったことから、工場跡の東側に石の舞台の設置とそこでの演劇を行うことで、島の魅力を知ってもらい、関係人口を増やす活動をしている。
- ・島の中で全てを賄うこと、手作りにこだわった。北木島の人がみんなで1時間半くらいの北木島オリジナルストーリーの演劇をし、演奏も島の人が行った。高校生のバンドは今回初めて結成。作詞・作曲も自分たちで行った。
- ・岡山から岩本さんという音楽家の方に来ていただいて、劇中の即興に音楽を入れてもらうということをしたが、一緒に演奏しているのは島の人だけ。
- ・演劇は長い期間練習をしていかないといけないので、疲れてきたとき、モチベーションを保つために、広報物もそうだが、YOUTUBEで練習の様子動画上げたり、ブログなどで情報発信したりしながら実施した。
- ・標題にも情報発信とあるが、都会から来て、移住したり長期滞在したりする人は、やっぱりその土地を選んでくる。そこがおもしろそうとか、おもしろくしようと頑張っている人たちがいるということがすごく重要。
- ・島なので環境にはすごく恵まれている。どういう人たちが住んで、何かやろうとしてい

る。しかもそれが楽しそうということ。何が楽しいかは人それぞれだが、若手漁師さんが音楽をやりながら、地域で老若男女が交わって何かやろうとしている姿を見たら、次なる一歩、アイデアをくれる仲間が来てくれるのではないかと思う。

- ・島に残る場の空気の良さ。周囲を気にかけてくれる力が集団になるとすごい。その場にいたら、島の外から来た人にも、その温かさは充分に感じることができる。島に残るコミュニケーションが生み出す唯一無二のスペシフィック・アートがこの島の魅力。
- ・今年も、秋頃に第二弾をやりたい。コロナにもよるが、食文化、海の幸が味わえるようにもしたい。

<質疑応答>

Q：サイトスペシフィック・アートに仕上げていく、それを島の人に自発的に取り組んでもらうということで、そういった形で、最初から島の人が島の魅力に気づいて発信していたかどうか、裏方として苦労された点、気をつけられた点、島外の人から見た魅力を伝えるとき、伝わっていく過程で、気をつけたことは？

A：案外その辺はあまり考えていない、考えの足りないところだった。参加してくれた方に対して、高齢の方などは、舞台に出るのが恥ずかしい、台詞を覚えることなどが難しいということはあったかもしれないが、たまに舞台に立つドキドキ感とか集まって話をするとかご本人達がわかっていて、外に魅力が出て行く説明などは特にしてない。やることに対して、NOというのは特になかった。何か楽しいことをしたいというのが集まってくれた人にはあった。

Q：地域での楽しみ方、納涼祭などの昔ながらのものが多い。今回みたいな新しいものが必要と思う。年4回季節に応じて演劇をし、季節ごとのおいしいものとのコラボをする、また、食や宿泊も長期的視野にいれたらよいのでは？

A：今回は、年1度新しいイベントであり、お祭りをみんなでする。一度出て行った方も、関係された方も、そのときは戻って来れる、新しい人も来られるきっかけをまずは年1回作ればということでやった。次回は2回目やれることをする。島には年4回できるポテンシャルがあると思うので、いろんな方のご協力を得て、季節に応じてできたら最高だと思う。

Q：陸地の人で島が好きな人にも声かけをすれば、労力の負担を島の人だけでしないのでいいのでは？

A：3回目以降くらいに、マンネリ化しないよう、新しいなにかを受け入れていけば、続いていくと思う。

Q：劇がいい。同じ劇はずっとは難しいので、年配の人の役を若い人がやる、またはその逆の形もいいのでは？

A：いろんなやり方があると思うのでいろんなアイデアをいただいたり、その人にやってもらったりしてやっていきたい。今回の劇は、YOUTUBEで「北木島 演劇」で検索をかけたら見ることができる。

<コメンテーターによる講評>

【阿部氏】

- ・北木島にはすでに演劇、演奏を集まってされている素地がある。普遍的な取り組みを地域の資源と捉えて、みんなで楽しみ、新しい取り組みにしている。だから、地域の人たちに受け入れられている。
- ・音楽も含めて、準備・練習期間が4か月で、島の人たちと一緒に練習したのは2か月半（週1）ということで、想像していたよりも短い時間でできていた。
- ・好きなことややりたいことは時間を割いてもするということが活動の原点。
- ・地域はだれのものということを考えたときにも、移住の方が来られるのは、地域を自分事として楽しんでいるところ。
- ・島が好きな人を巻き込み、無理をすることなくしていくことが大切。

【小川氏】

- ・すごいと思った。YOUTUBEで見れる動画が1本の映画のようだった。
- ・昔、青年団の人が田んぼで演劇をしていたのを、ただの記憶として語るのではなく、若い人も含めてつなげている。無理矢理つなげようとしているのではないので、同じ事が違う地域でできるかはわからないが、いろいろやり方はある。
- ・昔から根付いてきたものがあつたのと、少人数の中で、演劇の楽しみを知っている子達が頑張ってくれた。

（4）地域おこし協力隊 平岡顕治 氏 「暮らしの「見える化」で繋がる笠岡」

- ・笠岡諸島での活動は高島でドローンを中心とした活動をしている。
- ・高齢化だけでなく、日本の社会的孤立の15.3%はOECD諸国の中で一番高い。社会的孤立は病気になりやすい、生きがいの喪失に繋がると言われている。その中で、地域で出かけて行ける場所、働ける場所、人と関われる場所が必要。
- ・人に寄り添うあつたかデジタル活動を通じて、一人きりを作らない社会を作りたい。繋

がりを実感できる地域へ。繋がりを実感できるとは、人と人との間で「ありがとう」、「これ困っているよ」、「どういたしまして」というふうなことをやりとりできること。

- ・見える化→困っていることが見える化すること。その解決を図るプロセスこそが、人と人、地域と地域が繋がること。
- ・今日の登壇の目的は、お仲間の募集と、一緒にやっっていこうという人の募集。
- ・別添のまちづくりトリセツ（平岡トリセツ）のチラシの5番目の活動の概略は、地域の中でスマホ教室をやること。
- ・スマホのおしゃべり講師と、操作に不安を持つ方を組み合わせる。ITを生活に活用する「自分でできること」をサポートする。
- ・スマホ・パソコンが苦手な方が最も嫌なことが、「さっき言ったじゃん」「こないだ言ったじゃん」という言葉。→スマホなどが怖いと思う。
- ・何でも聞ける、安心ということから安心が生まれる。
- ・スマホ教室の特徴は、世代間交流やまちづくりの視点を取り入れている。
- ・住宅地で、パソコンと聞いたらすぐ不安になる方に向けて、シニア向けパソコン教室を子育てママさんとともにやっていた。不安を解消するのはおしゃべり。苦手な方が、こうやったら自分でもできると思ってくれる。
- ・「旅行の予定はありますか？」という会話から、行き方を調べたり、現地の地図を見たり、ストリートビューを見る。身近な生活に訴えていくと、おしゃべりが自然に生まれる。
- ・地域の中の視点では、スマホは、代わりに持ってきてくれる、代わりにやってくれる、手伝ってくれるという情報が地域で探せたり、防災の情報が誰でも見れたり、架空請求のハガキの電話番号や名称や住所がネットで検索すると、「それは詐欺です」と書いてある。
- ・自分で検索できたり調べたりすることは、自分の身を守ることにつながり、生活の役に立てる。
- ・受講生は、不安がなくなると、顔がすごく明るくなる。楽しくなる。「わからん。」「忘れた。」と言える。→安心する。わからないことを何でも聞ける。
- ・スマホは日常生活に活用できるので、聞きたいことが出てくる。
- ・不安はスマホではない。不安は健康や体の衰え、家族関係、人間関係→安心な場所では、暮らしの悩みや気づきをおしゃべりを通じて声に出せる。
- ・「助けて」といえる環境を日常的に作る。
- ・暮らしの課題、困りごとがわかり、それがこれからの社会を考える場に出てくると、社協や介護施設などと連携できる。
- ・コロナ禍で新しい生活様式に挑戦。大井町内会の公民館でオンラインで成人式が行われ

た。ある意味地域はオンラインに対応しないとつなぎ止められない分野がある。そのとき、すごくハードルが高いが、お手伝いしていきたい。

- ・ITは関心を持ってもらったら、難しいものではない。関心を持ってもらうには、楽しくないといけないし、自分に感じないといけない。→おしゃべりでできる。
- ・まとめると、スマホで元気な町をつくっていく、暮らしの困りごとを発見できる環境を作ること、課題を共有し、解決するための見える化をしていくこと、地域の方が参画しやすいまちづくりをしていくこと、圏域内外の人と地域の交流を促進するための素地づくりというのが、今日のお話だった。
- ・自分の役割は、企業や市民、NPO、行政を超えて、繋いでいく人間、設計する人になりたいと思っている。
- ・まちづくりをやっている人にわからないことを気軽に聞いてもらえるようになりたい。

<質疑応答>

Q：まちづくり活動で女性の年配の人が集まれば、スマホの操作が難しいという話が多く出る。スマホを使った地域コミュニケーションのいい事例はあるか？

A：オンライン町内会やオンライン飲み会、認知症家族の会などがある。いろいろな引き出しがあって良いと思う。オンライン町内会の記事で、若い世代が機材のセッティングをしていることが載っており、若い世代に参加してもらえているのは良いと思う。

<講評>

【阿部氏】

- ・とても大事な取り組み。一緒にやっている地域でも、みんな気にされていること。
- ・一緒に活動している地域の90代の方が試しにZOOMをしたとき、スマホでこんなことができるのを知らなかったと言っていた。設定は誰か一人やり方をわかる人が居れば、他の人はその人に乗っかってできる。
- ・使い方のわかる人が入って、みんなでスマホの悩みを解決していくカフェ形式の事例があった。
- ・地方で、距離が離れている、入ってくる情報が少ないといった問題があるところでも、やりようはある。若い人が出席するのが大変だといったときに、町内会の出欠確認くらいはLINEでできるようにするなど。
- ・やり方を作っていくのに、良いタイミングではないか。

【小川氏】

- ・ 4月以降に市民活動支援センター（の講座など）に来てほしい。
- ・ 人と人との関わりが、笠岡市の中でも難しくなったときに、SNSの新しい可能性がある。少し学べばできるということが大事。
- ・ いろんなところで伝えてほしい。

8 まとめ

【協働のまちづくり課 藤井課長】

- ・ 少子高齢化が進む中でまちづくりをどういうふうに進めていくかというのは、日々変化していくし、重要度も増している。一方で、担い手不足であるとか、活動をどうやって広げていくか、多くの人に参加していただくかというのは、そういう難しさを地域の方も感じていらっしゃると思う。
- ・ 今日の発表には、そういうことを解決する大事なポイントが込められていると思った。今日の発表ですと、まず、地域計画は非常に大切で、これから必須になるのではと思うし、学校・若い方との連携は地域の刺激にもなるし、将来の担い手育成にもつながると思う。地域の方が地域のためにやる活動が外部の人を巻き込む力があるということもわかりましたし、スマートフォンなんかも、地域のまちづくりにも活用できるし、それを支援してくださる方もすぐそばにいるというようなことも、今日の報告会でわかっていただけたのではと思う。
- ・ ほんの一例にすぎないと思いますが、今日のこの活動を少しヒントにしていただけたい。

【阿部氏】

- ・ 笠岡市の自分たちが主体的にしている取り組みは、全県でも注目されている。
- ・ そういう中でも、今、コロナで活動できない人も多いと思うし、コロナのことがなかったとしても、活動人口の減っているところがあると思う。こういう中で、特に高齢化、人口減少も考えた場合、課題の最先端に私たちは今立っている。
- ・ それを解決する方法としてはいろいろあるが、3つめの紹介でいただいたように「移住者と一緒に考える」とか、新山のように、「高校生と一緒に考える」とか、「最新技術を活用しながら、自分たちの持っている課題を解決する」といういろいろな方法がある。
- ・ そういう意味では、今までやっていることを続けていくのも大切だが、最初の紹介にあった、自分たちの地域の住民のニーズがどこにあるのかをしっかりと今の状況を見据えて、それを解決するためには、外の人も、中の人も、経験豊かな方も、若い方も、いろんな

人の力が大事だということが、4つの活動紹介を通して実感した。

- ・私たちがやっていることというのは、改革だと思う。こういう発表した方々と一緒に考えて行くことが大事。
- ・平岡さんがこういう社会を作りたいと言われていたことは、そのやり方だけだと難しいこともあるかもしれない。地域の協議会のみなさんが、それだとうまくいかないといわれることは、また一緒にやり方を考えて解決していくということができるのでは。
- ・味噌アイスを作ってみて、やっぱり今は味噌だれを作っていこうというような、コロナのこともあるから、まずは単発で頑張れること、やめてもいいからチャレンジしてみることをやってみて、そのあと、みんなが無理なくできることをやっけていながら進めていくと良いと思う。

【小川氏】

- ・笠岡市は、県内でもまちづくり協議会が進んでいる。一方で、10年たったので、まちづくり協議会も含めて、変わっていくときかもしれない。
- ・笠岡に学びに来ている高校生などに、まちのことを考えてくれる人が増えてきている。追い風だと思う。
- ・まちづくり協議会は大体、事業会制になっている。若い世代のいろんな人が入ってくれるような塊があってもいいかも。
- ・まちづくり協議会がどことつながるのか？というときに、ただ連携というより、具体的なことをいっしょにやる中で繋がっていくと、見えてくることがあるかもしれない。
- ・笠岡市市民活動支援センターの名称を変える話をしている。自身も変わっていききたい。

以上